

■江原素六とその周辺 65

江原素六の末弟丸山銀蔵のこと

■企画展開催のおしらせ

■館外展示報告

二〇二三年十月

通巻
151号

沼津市 史料館 通信 明治



北海道石狩川図

(当館蔵)

明治8年(1875)に開拓使地理課が発行。お雇い外国人ワッソンとデイ(アメリカ海軍大尉)の指導のもと実施された北海道での測地事業の最初の成果である。測量・作図の従事者11名の名前が掲載されているが、うち十三等出仕溝口善補・野沢房迪、御用掛関大之・奈佐栄は沼津兵学校の出身者。関は沼津兵学校附属小学校教授方並、他3名は兵学校資業生だった。五等出仕荒井郁之助は、榎本武揚軍の海軍奉行をつとめ箱館戦争を戦った旧幕臣である。幕府海軍や沼津兵学校で身に付けた技術が活かされた仕事だった。(樋口雄彦)

【参考】藤井陽一郎「明治初年における北海道の三角測量について」(『科学史研究』第45号、1958年)、黒田孝郎・遠藤一夫『先駆者と北海道』(1978年、北海道新聞社)

江原素六の末弟丸山銀蔵のこと

江原素六には義次(儀次と表記されることもある)と銀蔵という二人の弟がいた。素六の旧名は鑄三郎、義次の旧名は鉦次郎なので、三兄弟とも金偏の付く名前だったわけである。

『江原素六先生伝』(結城礼一郎著、一九二三年刊)は、銀蔵については、「馬術水泳に秀で、才幹衆に越えし」、「私よりは肩以上大きな男で、馬術体操水泳などに熟達して居りましたが、酒を飲むこと更らに甚しく」といった簡単な事実が記されているのみである。しかし、明治後期に記された素六直筆の雑記帳「三餘拾芥 七」(麻布学園所蔵)に、銀蔵の履歴と彼が養子に入った丸山家のことがよくわかる記述があった。以下は、その史料から判明した事柄を中心に述べるものである。

丸山家は、一八歳の鐘太郎が当主だった慶応四年(一八六八)時点で、本国は三河、高二〇俵二人扶持(うち八俵足高・一人扶持足扶持)であり、「本郷御弓町諏訪源太郎家来芝山郡司」方に同居していた。鐘太郎は慶応二年(一八六六)七月一〇日から撒兵を命じられ、当時は小筒組に属した。祖父金太郎は大番同心をつとめた人、父欽司は故人となっていた。慶応四年八月には、老母は芝山郡司方に預け、自分一人だけで駿府に移住する旨を届け出ている。なお、全一二組あった大番に二〇名ずつ配された大番同心は御家人であり、鐘太郎は幕末の軍制改革の中で撒兵に編入されたらしい。

鐘太郎は移住先で死亡したのであろう、明治二年(一八六九)七月に江原銀蔵が急養子として丸山家の家督を相続することとなったのである。以下がそのことを記す原文である。

二元高拾式俵寺人扶持 丸山銀蔵
 持扶持寺人扶持 宿所駿東郡西間門村新家半平方 巳十六才
 養祖父丸山欽司死 養父丸山鐘太郎死 祖父秋元千万作死 実父秋元利左衛門死
 明治二巳年七月廿一日養父家督被下置、直ちに生育方頭取支配被命、同年九月六日勤番組被命候

生育方頭取支配

鐘太郎養子

丸山銀蔵

右御用之義有之候間、明廿一日四時染帷子麻上下着用御殿へ罷出候様可被達候事

七月廿日

申渡

丸山鐘太郎跡
 急養子
 同 銀蔵

願之通り家督無相違銀蔵に被下置、直二生育方頭取支配可相勤旨、綾雄殿被申渡候、依之申渡

一六歳の江原銀蔵は一九歳の鐘太郎(素六は「正三郎」と誤記している)の養子になったことになる。江原家は旗本とはいえず少禄であり、次三男が御家人の家を継ぐことには、それほど抵抗がなかったのか、幕府瓦解により家格の差もあまり意識されないようになっていたのかもしれない。右の文書では、銀蔵の実父が秋元利左衛門、祖父が秋元千万作とされているが、実際は千万作は母方の祖父にあたる人物であり、このような書き方がされた理由は不明である。また当時の仮寓先である西間門村の半平(半兵衛)とは、豪農・地主長倉家(屋号新屋、後の当主は計吉)のことであり、素六が仮寓した先でもあった。

ちなみに、本史料とは別の史料によれば、銀蔵は沼津移住前、彰義隊戦争に際して、抗戦派の旧幕臣のもとに火薬を持参し、新政府軍の参謀が滞在する彦根藩邸の放火を勧めるといった行動をとったことが知られる(拙稿「江原素六の戊辰時脱走抗戦関係史料」『沼津市博物館紀要』33)。佐幕派の熱血少年だったのだろう。銀蔵が明治一八年(一八八五)七月に記した履歴書も素六の手によって書き写されているが、原文通りではなく簡条書きにしてみよう。

- ・文久2年〜慶応2年 聖堂で漢学修業
- ・慶応3年〜明治2年 東京で漢学・数学修業
- ・その後〜明治7年 沼津小学校・中学校で漢学・英学・洋算等修業
- ・明治7年7月〜 沼津の小学校で教員
- ・明治8年12月20日〜9年11月 熊谷県暢発学校で十二等教員
- ・明治9年12月〜11年12月 前橋町厩橋学校で教員
- ・明治12年1月〜14年9月 東京で漢学・英学・数学等修業
- ・明治14年10月〜 上州富岡町富岡学校で教員
- ・明治16年3月 病気のため沼津に帰る
- ・明治17年5月〜 駿東郡大岡村大岡舎で助教員

旧幕時代には、兄素六と同様に昌平黌で漢学の修業をしたことがわかる。

「沼津小学校」から「沼津中学校」に学んだというが、東京から明治二年(一八六九)に沼津に転校したのだとすれば、この「沼津小学校」とは沼津兵学校附属小学校のことを意味する。沼津中学校は兄素六が校長をつとめた学校である。沼津兵学校附属小学校の出身で後に陸軍大佐となった神谷景昌は、沼津での修学当時、

銀蔵とは親友だったといひ(拙稿「神谷景昌」如夢草稿)の翻刻と紹介『沼津市博物館紀要』35)、その学歴が裏付けられる。

銀蔵は二人の兄と同じく教育の世界で生きた。教鞭をとった熊谷県の教員養成学校である暢発学校は、沼津兵学校出身者が多く採用された学校であり、彼らは沼津で身に付けた洋算を普及させるなど、同地の教育に大きく貢献した(拙稿「学制期諸県に及んだ静岡藩小学校掟書の影響」国立歴史民俗博物館研究報告「第一六七集」)。銀蔵もそのような人材の一人だったといえる。

なお、履歴書を書いた明治一八年時点でも大岡舎勤務であり、「沼津八幡町寄留 静岡県平民」となっている。明治八年(一八七五)に家禄奉還願を提出した際は、西熊堂村の居住となっていた。

沼津にもどった後、妻尚子(直子)が明治二二年(一八八八)に病死し、銀蔵は四月二四日から素六方に同居することとなった(『加奈陀メソヂスト日本伝道概史』)。沼津市・本光寺の過去帳には、「四月廿日 妙想信女 八幡町寄留丸山銀蔵妻ナヲ」と記されている。その直後の五月三〇日、銀蔵は娘ハルを横浜山手にあった、サン・モール修道会が設立した「仏国仁慈堂女学校童貞修院(修道院の「道」が欠か、後に横浜紅蘭女学校、現横浜雙葉学園)に預けることとした。幼い娘を男手一人で育てられないと判断し、このような処置に至ったのである。「終身教育」、すなわち修道女にすることを依頼している。「天主教信奉可仕」ともあり、ハルはもちろん、銀蔵自身もカトリックに入信する意志が示されている。この「盟約書」には、保証人として素六が名を連ねた。



表紙



緒言部分

江原義次編『聖人伝』
(当館蔵)



丸山銀蔵墓
(沼津市西熊堂共同墓地)

兄素六は言うまでもなくプロテスタントの信者であり、弟が別宗派というのは不思議である。しかし、もう一人の弟江原義次は、『聖人伝』上下(一八九四、九五年刊、出版元不明だが扉に「東京大司教伯多禄瑪利亜准」とある、緒言は「駿河沼津 江原義次」という書籍を刊行しており、やはりカトリック信者だった可能性がある。義次は幕末に横浜語学所でフランス人教師から学んだ前歴を持ち、明治初年の開成学校では教授試補・三等教授としてフランス語を教えたので、フランスとの関係が深まり、カトリックの信仰へと導かれたのかもしれない。あるいは銀蔵は義次の影響を受けたのであろうか。ただし、確証はなく、上記のことは想像の域を出ない。

娘を施設に預けてまで何かやりたいことがあったのかもしれないが、銀蔵はそれからほどなく、明治二三年(一八九〇)、三六歳の若さで亡くなった(『江原素六先生伝』)。生まれは安政元年(一八五四)二月一〇日であり、明治二二年(一八八九)六月一二日没ともされる(「子女の求に応じてしるす」)。銀蔵とその家族の墓は、沼津市西熊堂の素六の墓のすぐ近くに建てられているが、没年月日は「明治廿二年七月廿二日」と読める。どれが正しいのであろうか。

墓石によれば銀蔵には一男二女があったらしいが、銀蔵没後、素六の次男次郎が丸山家を継いだ。しかし、長男の兄帯一が若くして病死したため、嗣子として江原家にもどった。そのため、丸山家は素六四男の愛作が継ぐこととなった。

企画展開催のお知らせ

令和4年度第1回企画展 地域の歴史シリーズ3「うきしま」 令和4年10月1日(土)～11月27日(日)

本展では、「地域の歴史シリーズ」展の第1回「へだ」(平成27年度)、第2回「かなおか」(令和3年度)に続く第3回目として「うきしま」を取り上げました。NHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」でも主要人物として扱われた阿野全成に所縁があり、「大河ドラマ紀行」でも紹介された井出・大泉寺をはじめ、日本最古級の遺跡が発見されたり、戦国時代の魁といわれる「北条早雲旗揚げの城」があったりと深い歴史のある地域です。

沼津市の西に位置する「うきしま」地区の、豊かな歴史を改めて知っていただければ幸いです。



駿州興国寺城絵図

◆ ギャラリートーク ◆

11月12日(土) 11時～

申込 11月8日(火)9時から

電話又は直接

定員 8人(先着順)

参加費 無料(観覧料は必要)



浮島地区
マスコットキャラクター
©浮島まちづくり委員会



令和4年度第2回企画展 富士・沼津・三島3市博物館共同企画展 「このへん道中いまむかし 富士・沼津・三島の観光」 令和4年12月10日(土)～令和5年1月29日(日)

本展は、富士・沼津・三島3市博物館協議会で隔年開催している共同企画展です。今年は観光がテーマの展示を、3市それぞれの会場でご覧いただけるよう、巡回展のかたちをとっています。

江戸時代には東海道五十三次の宿場があり、浮世絵や道中日記などにもお馴染みの名所や名物が登場しています。明治以降、鉄道をはじめとした交通が発達すると「このへん」は東京から手ごろな距離の観光地となり、海水浴をはじめとする近代的なアクティビティが楽しめるようになりました。近年、新たな観光ジャンルの誕生によってこの辺の魅力はますます多様化しています。感染症の流行によって移動が制限され、遠方への旅行が難しいこの頃。旅と観光がもたらす非日常感を恋しく思うかたも多いことでしょう。本展を通じて、観光の視点から身近な地域の魅力を感じ、新たな楽しみ方を発見していただければ幸いです。



◆ ギャラリートーク ◆

12月10日・1月14日

いずれも土曜日 11時～

申込 12月10日分 12月6日～

1月14日分 1月11日～

9時から電話又は直接

定員 各回8人(先着順)

参加費 無料(観覧料は必要)



絵はがき「沼津八景三津水族館と龍宮丸」
(昭和初期)



◀ 汽車土瓶
(昭和初期)

駅のホームで
弁当の立ち売りから
買いました。
停車時間内に買えるか
ドキドキでした。
今はペットボトルで
持ち歩きが楽ですね。

沼津市明治史料館通信

第151号

令和4年10月25日

編集・発行 沼津市明治史料館

〒410-0051 沼津市西熊堂372-1

TEL 055-923-3335

FAX 055-925-3018

印刷 株式会社 耕文社

館外展示報告

今年も、ぬましんストリートギャラリー(大手町 沼津信用金庫本店)に於て、館蔵資料展「沼津の歴史 虎の巻」(9月2日～29日)を開催しました。学芸員資格を取得するための実習生2人が中心となり、来年市制施行100周年を迎える沼津の歴史を知るためのキーポイントを分かりやすくまとめました。

観覧者にどのように解説したらよいか、どのように展示したらよいかなどを考える、実習生には良い経験になった様です。



実習生の展示風景